

NPO法人 SET (岩手県陸前高田市)

東日本大震災で甚大な被害を受けた陸前高田市広田町地区で、住民と地域活性化に取り組み、震災直後に活動を始めた、これまで約800人の住民と協力してきた。2013年からNPO法人化し、全国から大学生を呼び込んで住民と企画を考えたり、修学旅行の誘致をしたりと交流事業を展開。だが、コロナ禍で困難になり、現在は地域密着の活動に力を注いでいる。

運営する「カフェ彩葉」は、互いに支え合う居場所を目指し、古民家を改装して18年に開業。以来、食事のほか、英会話教室や演奏会などのイベントも開催している。学生時代から活動し、移住したオーナーの野尻悠さん(28)は「店名の通り、いろんなスキルを持つ人たちが集まって、彩りをもたらす店になってほしい」と笑顔を見せる。

被災地で交流店や宅配

20年から、津波で商店街が流されて気軽に買い物が出来ない高齢者のために、生鮮食品を配達するサービスを週に1回実施。移住者と住民の関係を構築するきっかけにもなっている。

理事長の三井俊介さん(33)は「地域に密着し、町内外の人たちが心地よく支え合えるような活動をしていきたい」と話している。(盛岡支局・三品麻希子)



住民らとカフェ「彩葉」制作のワークショップ(今年2月、SET提供)

認定NPO法人たすけあいの会ふれあいネットまつど(千葉県松戸市)

年齢や障害の有無に関係なく、住み慣れた地で自分らしく暮らしてほしい。そんな思いから通院時の送迎など日常の困りごとを手助けする有償ボランティアを、行い、高齢者が気軽に集まれるサロンも手がける。「困った時はお互いさま」。1998年の設立メンバーで、代表を務める佐久間浩子さん(67)は、この言葉を大切にきた。障害のある息子の送迎依頼をしてきていた母親が、後に事務作業の仲間に加わってくれたこともある。助け合いの精神が多くの人を巻き込み、有償ボランティアは100人以上に増えた。

絵手紙や手芸、オカリナなどの教室とお茶会をセットにしたサロンは、参加者の憩いの場だ。お茶菓子を片手に談笑することで心の距離も自然と縮まる。スタッフの鈴木由紀子さん(79)



歌の教室で参加者に語りかけるボランティアスタッフ(右)(11月15日、千葉県松戸市で)

お互いさま精神で24年

「心のような取っ組み合い、大丈夫という安心感にあふれている」と明かす。県内で同じような活動に取り組み団体は他にもあり、佐久間さんは「まだまだいよつこな、ありがたい」と受賞を謙虚に受け止める。助け合いの輪を広げるため、今後は同じ志を持つ団体と協力していくことも考えている。(千葉支局・平田健人)

NPO法人 UPTREE (東京都小金井市)

東京都小金井市で2013年以降、介護が必要な人や一人暮らしの高齢者らと地域の店舗を巡るスタンプラリーを行ったり、生活相談に応じたりする活動を続ける。孤立しがちな人々に地域とのつながりを感じてもらうためだ。

設立者で代表理事の阿久津美栄子さん(55)は、自身の子育ての最中、離れて暮らす両親を介護した経験を持つ。入院の手続きや介護保険制度に明るくなく、周りには相談できる人もいなかったため、孤立を深めて精神的に追い詰められた。当時を「とにかく話を聞いてくれる人がほしかった」と振り返り、気軽に悩みを打ち明けられる居場所を作ろうと思いついた。

スタンプラリーでは地元飲食店や新聞販売店に加えて社会福祉協議会も訪ね、介護問題や高齢者の相

介護めぐる孤立を防止

談窓口を紹介する。阿久津さんも介護経験を生かして悩みに耳を傾ける。母親の介護の相談に訪れた市内の男性(28)は「心が軽くなった」と明る表情を見せた。少子高齢化の進展で、若者の相談者も増えており、阿久津さんは「地域での支え合いが欠かせない時代に」と話している。(社会部・岡本遼太郎)



スタンプラリーで台紙にスタンプを押してもらった参加者ら(11月14日、東京都小金井市で)



第20回 受賞6団体

新しい時代にふさわしい福祉活動を実践している団体や個人を顕彰する「読売福祉文化賞」の受賞団体が決まった。20回目を迎える今年も、一般部門で障害者も一緒にサイクリングが楽しめる2人乗り自転車普及に取組む「認定NPO法人タンデム自転車NONちゃん倶楽部」(松山市)など3団体、高齢者福祉部門で地元食材配達やカフェの運営を通して東日本大震災で衰退した地域の再生に取り組み「NPO法人SET」(岩手県陸前高田市)など3団体が選ばれた。7日に読売新聞東京本社内で表彰式が行われ、受賞団体には活動資金として100万円が贈られる。福祉の向上に取り組み各団体の活動を紹介します。

【高齢者福祉部門】

活気と優しさ 笑顔呼ぶ実践

【選考委員】(敬称略)
安藤雄太 東京ボランティア・市民活動センターアドバイザー
栗原小巻 女優
袖井孝子 シニア社会学会会長
高木憲司 和洋女子大学准教授
馬場 清 日本福祉文化学会副会長
保高芳昭 読売新聞東京本社編集委員

主催 読売新聞社
読売光と愛の事業団
厚生労働省
日本福祉文化学会

一般社団法人 シブヤフォント(東京都渋谷区)

障害者が描いた原面にデザインを加え、専門学校生らが手を加え、完成した図柄やフォントを販売。使用料の一部を障害者に還元する取り組みを続けている。

就労支援施設での一般的な工賃が月額1万5000円ほどにとどまる中、自立に向けた支援だけでなく、障害者が手がけたアートの収益化も成功させた。

ゆがんだ文字や傾いたピルの絵なども立派なアート作品になる。これまでにユニクロやキヤノンといった大手企業の製品から地元企業のロゴにまで幅広く生かされている。共同代表を務める磯村歩さん(55)は「事業の普及と合わせ、障害者と地域のつながりを深めることの大切さを伝えていきたい」と話す。

知的障害や精神障害を抱える人はコミュニケーションが苦手な人も少なくない。



シブヤフォントが使われた製品に囲まれる磯村さん(左)とアートディレクターのライカ・カセムさん(11月18日、渋谷区で)

障害者アートを収益化

それでも、数か月間にわたって作業を共にすることで活気が生まれる。自身の作品が社会に認められた障害者は自信を持ち、学生も障害に対する理解を深めているという。

取り組みを全国に広めるために奮闘する磯村さんは「障害はただの『違い』にすぎない。社会にとって大きな力になってほしい」と話す。(社会部・浜田萌)

NPO法人 響愛学園パラ・アーティスト・マネジメント協会(愛知県一宮市)

障害者らの音楽など芸術分野の才能を引き出し、活躍の場を広げる支援をするため2018年に設立された。音楽を教えたり、コンサートを開いたりして、一人のアーティストとして活躍できるようにサポートする。

母体となる響愛学園は10年、特別支援学校で音楽講師を務めた児島真里子さん(62)が設立した。ピアノの音色に指先を動かして反応する重度の障害児に接したことなどから、「音楽を通して障害のある子どもたちに夢や希望を持ってもらいたい」と、18歳までを対象に音楽などのレッスンを提供する放課後デイサービスを続けてきた。

現在、所属アーティストはプロ2人を含む20人。名古屋で今年3月、9月、所属アーティストによるコンサートを実施。5月には神戸市で「第1回Para国

パラ音楽家を発掘支援

際音楽コンクール」を開いた。バイオリンを弾き同コンクールで銀賞に輝いた近藤楓佳さん(20)は「おかげで活動の幅が広がった」と笑顔を見せる。

児島さんは「所属する人たちは、才能にあふれた『ダイヤモンドの原石』。受賞を励みに、みんなが輝けるよう支援していきたい」と意気込んでいる。(中部支社・沢村宣樹)



近藤さん(右)の演奏に聴き入る児島さん(11月21日、愛知県一宮市で)

認定NPO法人 タンデム自転車NONちゃん倶楽部(松山市)

2人で力を合わせてタンデム自転車、様々な障害を持つ人たちに自転車を楽しくもたらしイベントを12年間、開いてきた。理事長の津賀善さん(71)の夫・徳行さん(NONちゃん)は薬害で視覚障害者となり、「夫婦でタンデム車でサイクリングしたい」と望みながら、2009年に63歳で亡くなった。翌年8月に愛媛県規則が改正され、タンデム車の公道走行が可能になったのに合わせ、「夫の夢を実現したい」と2台のタンデム車を買った。視覚障害者向けの体験イベントを改正初日に開いた。

「人とのつながりに支えられてきた」。月に1回程度開いているイベントは、自転車愛好家、競輪選手OB、行政機関職員、様々な人が手伝う。参加者の初めて自転車に乗れた。「風を切って気持ち良かった」。



サイクリングを楽しむ障害者ら(タンデム自転車NONちゃん倶楽部提供)

銀輪で障害者と夢広げ

ボランティアの「多くのことを学べた」という感謝の声が活動の原動力だ。

身体まひの人にも乗れる車椅子自転車を導入するなど今では自転車は約40台。参加者からは「トライアスロンに挑戦したい」「しまなみ海道を走りたい」など夢も寄せられる。「体が続く限り目の前の皆の希望をかなえていく」と話している。(松山支局・上羽宏幸)